ある。特に西条キャンパスは地理上，RIに関して特別の配慮が必要であるので，今後施設利用を考えられる方々は，充分この点を認識してご協力下さることをお願いする次第である。

今後に向けて　既設の他大学施設を見ても，年を経るごとに利用者は激増している。広島大学の場合，既に127名の登録者があり，他大学に劣らない数であるが，今後移転が進行する過程で，その数は更に増加すると予想される。従って，これまでの運営上体験し得なかった新しい体験と対応を考慮しなければならなくなると思われるが，いずれにしろ共同利用施設の長所を生かし，学部を越えた生物学，生化学の芽を育てて行くべきであろう。その事が新しい生物学部の誕生をもたらす礎となるものと考える。

社会・人文科学における学際研究

――平和科学研究センターの場合――

平和科学研究センター長　森　祐二

はじめに――現代の学問では学際的研究は欠くことのできない発展の一要素である。

科学研究の方向を単純化して示すとすれば，深く深く探求を進める方向と広く広げる方向とに分けられる。このことは一時，垂直思考と水平思考とかいわれて一種の流行のようなおもむきがあった。それに加えて，両者を統一したT型思考の重要性などが強調されたことであった。ここで科学といったのは学問的というほどの意味ではあるが，あえて科学といったのは，**方法**に力点をおきたかったからである。科学においては対象だけではなく**方法が不可欠の要素となる**。そして，方法がその適用限界を明らかにするところに科学研究は大きな意味をもつ。たとえばの話，筆者が研究生活をはじめた頃には，まだ，細菌細胞に核はあるか？　という論文があった。それは光学顕微鏡観察の限界にいどんだものであったが，今では高校の教科書にもあるように，細菌細胞には核膜に囲まれた核はない。しかし，遺伝物質は存在しなければならない。DNAの糸状の形を見るためには電子顕微鏡を待たねばならなかった。さらに，DNAの遺伝子機能を確かめることができたのは生化学的方法であった。

ここに，表題にとって場違いなことからはじめたについては，ある意図があったからであるが，本学においても“遺伝子実験施設”ができて，さまざまな領域の研究者によって共同利用されるようになったからである。それは高価な機器を効率よく利用するということだけでは決してない。研究対象にむかって**さまざまなアプローチをとる**ことは方法とともに科学研究の発展には重要な要素なのである。

研究対象そのものも，また，学際的となった。遺伝現象を再び例にとれば，理学・医学・農学・工学の領域で形能・機能・構造に関して，眼にみえるマクロのレベルか顕微鏡的・電子顕微鏡的・分子・分子以下までのさまざまなミクロ・レベルにおいて研究が進行するのである。研究領域が確立されると，たとえば，ここに例示した遺伝学の場合にも，それが学際研究と意識されることはまれになる。しかし，ある研究領域が新たに形成されようとするときには学際研究として出発するといっても決して過言ではない。

平和研究の場合

社会科学，人文科学においても研究領域がひろがるのにともなって学際研究がおこなわれるようになった。ここでは“平和研究”を例として議論をすすめるが，それは社会・人文科学を中心とした学際研究の一例としてだけでなく，本学に平和科学研究センターが設置されているからであるのはいうまでもない。

平和科学研究センター設置の初期（設置は1975年），平和研究の学問的構造を明らかにするための研究がおこなわれた(註)。平和の概念は広範にわたるばかりでなく，漠然としてあいまいなこともあって，平和研究の内容・性格の把握を困難にしているようにみえる。分析に使ったデータベースは Peace Research Abstract Journal vol.12.1975であって，7,455件の文献を処理した。これは初期平和研究といってもよい年代に属するものではあるが，そこで研究の対象とされたテーマは850件であった。それらは相互に関連づけられて議論されるが，1論文当たり平均6件の問題が論ぜられていた。平和がさまざまな問題との関連において研究されることを実証的に示したものといえよう。これらの平和研究を主題によって分類すると：軍事情況，軍備制限，緊張と紛争，イデオロギーと係争，国際組織と地域的同盟，国家と国家政策，国家間関係と危機地域，国際法，国際経済と外交，意志決定とコミュニケーション，方法その他の10分類に包括される。（これ以上の紹介は紙数がゆるさないのでやめるが，）平和研究の研究対象は，平和そのものというよりも，むしろ，平和の実質的内容についてであることが以上の簡単な紹介からも理解されよう。これは平和研究が学際的科学的研究であることを示す一例といえよう。

それらの対象がさまざまな方法によって研究されることはいうまでもないが，ある対象についていろいろな方法によって研究されることが平和研究のもうひとつの特徴であろう。“平和”がさまざまな人間活動の目標であるからには，その実質的内容を研究する平和研究もまたさまざまな領域からの研究となる。さらに，“平和”が現実世界の課題であってみれば，社会・人文科学を中心としたさまざまな領域から，政策科学的—，批判科学的—，理論的—アプローチ，等など，多くのアプローチのあること，これまた平和研究が学際研究であることを物語る。

平和科学研究センターの課題

上にごく簡単な紹介をしたように，平和科学研究センターは平和研究の学問的性格を明らかにしながら，みずからの研究活動をおこなってきた。しかし，1989年4月1日現在，専任研究員4，兼任研究員21，客員研究員22，という規模の活動は課題の選択を必要とする。年中行事である“平和科学シンポジウム”のテーマを分類すると：設立10周年記念の平和研究の課題と展望のほか，世界秩序の理論や現実に関して4回，NIESをふくめ平和と開発に関して4回，戦後日本の政治・外交に関して3回，平和と教育，危機における政治権力各1回，となる。このほか，国連大学と共催して平和と開発に関して2回の会議を開催した。

センター自体としては，平和研究関係の文献資料の収集につとめてきたが，ある程度の充実をみるに至ったといえようか。4人の専任研究員はそれぞれのテーマの下に研究をすすめているが，大まかにいえば，平和に関する政治，あるいは手記の言語分析，開発の政治・経済の理論・現状分析，1930年代戦時日本の政治と教育，等など，にくくることができる。

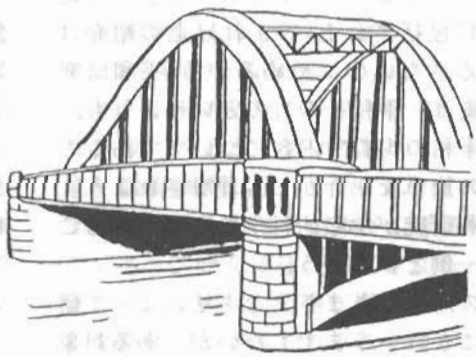
平和研究が広い領域にわたるとはいえ，それは平和問題の一部をなすものである。殊に広島大学は，その歴史と経験から，いうまでもなく，全学の活動のすべてが平和に貢献することを理念とする。かつて，平和科学センター創設期に，広島大学は平和大学の名称を冠すべきだという議論のあらわれたことがある。このセンターは，本学の理念とするところを新興の学際領域である平和研究によって実現しようとするものである。

しかしながら，内外の平和研究を見渡すとき，このセンターも例外ではなく，その努力にもかかわらず，問題の緊急性，必要性に十分にこたえるうるだけの進展をみないように思えてならない。それはひとえに世界的にみて平和研究者の数の少なさによるといえよう。平和を崩壊させる根はひとびとの日常の中にもあることを忘れてはならぬ。政治や経済だけが平和を保証するのではない。

おわりに——社会・人文科学における学際研究の必要性

平和研究が社会人文科学を中心とした学際研究の一領域であることについて説明してきた。社会人文科学においても学際研究が盛んになる勢いにあるが，本学においてもそれらをよく組織して十分な成果をみるような施設が必要である。平和研究もその一翼であり，センターはそうした組織の一部をなすべきものと考える。こうした学問の発展からきり離された平和研究の突出はありえない。

平和研究の側からいえば，学際研究への刺激と課題を提供し，また，他の学際研究からは新しい平和問題をつきつけるといった関係が最も好ましく思われるのである。

註：松尾雅嗣・森祐二・阿部耕一朗（1977）平和研究文献の情報構造：最近の軍事問題とその研究方法　広島平和科学1

——————（1977）学際領域（平和研究を中心として）における情報の構造特性（Ⅰ）～（Ⅵ）　情報管理21，No.1～4，6，7